

開催地名：京都府宇治田原町	
開催日時	令和 5 年 2 月 5 日（日） 10：00 ～ 12：00
開催場所	宇治田原町総合文化センター
語り部	菅原 康雄 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災会、防災士、消防団、民生児童委員等 約 150 名
開催経緯	<p>近畿地方において発生した阪神・淡路大震災や大阪府北部地震では、幸いにして本町は大規模な被害を免れており、地震に対する危機意識が低下している。</p> <p>しかし、本町で最も大規模な被害が想定されている奈良盆地東縁断層帯地震や南海トラフ地震の発生が危惧されているとともに、土砂災害警戒区域が町内に点在しており、大規模地震による土砂災害発生の危険性があるため、災害に対する危機意識の醸成を図りたい。</p>
内容	<p>（１）福住町町内会の取り組み</p> <p>福住町町内会は仙台市宮城野区の中央に位置し、417 世帯 1,138 人からなる。（令和 4 年 10 月末現在）そして、町内会の執行部は 41 人で構成されており（10 世帯に 1 人程度の役員を選出）、そのうち 23 人が女性である。一般的に女性のほうが男性より生活能力が高いため、災害時の避難所で食事の準備をしたり、子供や高齢者、病人等の面倒をみたりするのはほとんどが女性である。力仕事や交渉事など、男性のほうが適している能力もあるので、互いの長所を有効に活用していくことが、特に災害時には重要だ。</p> <p>我々は、自分の身は自身で守るというスタンスを基本として活動している。具体的には、実際の被害を想定した「訓練」と、地域での「協力体制の整備」の 2 本柱で取り組んでいる。「協力体制の整備」については、日頃の挨拶にはじまり、顔見知りになっていくことから始めている。そうすることによって、色々な住民が相互に協力してくれるようになってきたと言える。</p> <p>そして、続いて紹介したいのが「名簿作り」である。この名簿こそが我々福住町の徹底した防災対策の根幹をなすものとなっている。名簿の中に落とし込むのは住所、氏名、電話番号、勤務先、緊急連絡先、動物（ペット）の有無といった項目で、これを毎年 1 度行う防災訓練の前に更新している。もちろん、町内の全員が賛同してくれる訳ではないので、「個人情報保護法」を遵守しつつ作成をしている。それでも町内の約 8 割は賛同してくれるので、大災害時の安否確認の時には非常に役立った。</p> <p>もう一つの柱である「訓練」については、通常の「防災訓練」だと一般の方々の参加はあまり見込めない。そうすると、行政職員や消防関係者の方々だけの緊張感のない形式的な「防災訓練」となってしまう、あまり効果を見込めないものとなる。「防災訓練」を地域のお祭りやイベントなどと一緒に実施すると、お年寄りから幼児まで幅広い層の参加者が見込め、ひいては、地域全体で「協力体制」を取れるようなシステム作りにつながって行くようになる。福住町では中学生も学校行事として参加するように設定し、住民とともに役割を持って消火訓練等に取り組んでいる。</p> <p>（２）東日本大震災時に感じたこと</p> <p>毎年厳しく繰り返される防火・防災訓練による効果は、東日本大震災発災直後の行動に顕著に表れて、発災後 30 分で重要支援者の安否確認、集会所への避難住民誘</p>

導、仮設トイレ・瓦礫置き場、ガス・水道のライフライン等を設置させた。この時改めて感じたことは、避難所設営では、空気の読める顔見知りの方が中心となることと、運営面では女性の目線が絶対に必要であるということだ。そして避難所運営で最も大切なのはトイレの問題である。トイレの問題は、阪神淡路大震災でも取り上げられた。命からがら逃げ込んできたのに、地震の直接の原因以外で亡くなってしまう要因の一つに、「トイレへ行かない」という事が報告されていた。従って、緊急事態の時でも、いかにしてトイレを利用しやすい状態で準備・設営するかを真剣に考えなくてはならない。

また、避難所では、在宅避難者にはおにぎりなどを配布できなかった。30分かけて高齢者が自宅から歩いて来ても、食料を提供できなかったのだ。在宅避難者も同じように被災している。しかし自宅にいるというだけで救援物資を分け与えることができない。こうした点は今後検討していく必要がある。

事前に災害時相互協力協定を締結していた尾花沢市等の全国4団体（現在14団体）から届けられた支援物資は、避難所でありがたく消費・活用させていただいたが、余剰となった分については、順次津波で打撃を受けた県内・県外の地域に送り届け、支援させていただいた。この取り組みは今後も継続していきたい。

### （3）さいごに

皆さんの地域でも、減災を目標とした防災活動を実践していただき、災害に対する備えを進めていただきたいと思います。最後に是非実践していただきたい言葉をお伝えしたい。「止むことのない災害に強い危機管理意識を持って、自分が助かるすべてを真摯に検証し、たったひとつの大切な命を守りぬく強固な意志を貫くことである」という言葉だ。この町から一人の犠牲者も出さないと全員が結束すれば、どこよりも隣人に優しい住みよい町になると思う。



開催地より

ご自身の体験談を交えながら、住民の危機管理意識を向上させ、自助・共助に力を注ぐことの大切さについてわかりやすくお話をしていただいた。参加者は災害に対する具体的なイメージをつかむことができたと思う。今後本市としては、大規模地震に対する危機意識の向上を図るとともに、各地区での、自主防災活動への女性や小・中学生の参加の呼びかけを、積極的に行っていきたい。